

## 「(仮称)さいたまトリエンナーレ」に関する有識者インタビュー

## 実施概要

日時	平成 25 年 9 月 11 日 (水) 14:00~16:00	
場所	東京藝術大学千住キャンパス 熊倉研究室	
対象	<p>東京藝術大学音楽学部 音楽環境創造科教授 くまくら すみこ <b>熊倉 純子 氏</b> &lt;意見概要 P. 1~2&gt;</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門は文化環境論 (文化支援)、アートマネジメント。</li> <li>・企業メセナや行政・財団などによる芸術支援、地域社会と文化芸術の関係、市民社会における文化芸術の役割、芸術分野における NPO の活動等を研究</li> <li>・東京アートポイント計画 Tokyo Art Research Lab 報告書『日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990 年→2012 年』監修</li> </ul>
日時	平成 25 年 9 月 19 日 (木) 13:00~15:00	
場所	白川昌生氏アトリエ (前橋市)	
対象	<p>現代美術作家 しらかわ よしお <b>白川 昌生 氏</b> &lt;意見概要 P. 3~4&gt;</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域とアートをつなぐ美術活動団体「場所・群馬」を創設</li> <li>・第 1 回越後妻有大地の芸術祭「さわれる風景 I 城主の座」</li> <li>・水と土の芸術祭 2012「沼垂ラジオ」</li> </ul>
日時	平成 25 年 10 月 4 日 (金) 9:30~11:00	
場所	埼玉県立近代美術館	
対象	<p>京都市立芸術大学学長 埼玉県立近代美術館館長 たてはた あきら <b>建畠 哲 氏</b> &lt;意見概要 P. 5~6&gt;</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多摩美術大学教授、国立国際美術館長などを経て、2011 年より現職。専門は近現代美術。</li> <li>・1990 年、1993 年のヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、横浜トリエンナーレ 2001、あいちトリエンナーレ 2010 のアーティストイック・ディレクターなどを務める。</li> <li>・アジアの近現代美術の企画にも多数参画。</li> </ul>

# 「(仮称)さいたまトリエンナーレ」に関する有識者インタビュー

(東京藝術大学教授 熊倉純子氏)

## I 開催意義や基本的な方向性などに関する意見

- ぜひ、東京オリンピックのひな型になるようなものをつくってほしい。まちを発見して、まちの人にもてなされて、すごく面白い視点で、古くからあるものを新しい視点で捉え直していたり、いろいろな驚きがあったりして、「来て良かった、この1日で自分は成長した」と思わないと、来場者は満足しない。
- まちの財産になるものは、結果ではなくプロセス。3年に1度、誰も見たことのない本番の舞台に向けて、多くの人がそれぞれ勝手なイメージを抱きながら議論して、考え方の相違が明確になることがとても大事なこと。みんなで一つにならないところが、実は文化がもたらす大変重要なこと。
- 価値観の異なる人たちが共存しているのが、今日の都市部。従来のホールや美術館、様々な文化活動支援などの取組は、各人がそれぞれの価値観のコミュニティに閉じこもる手助けしかしてこなかった。新たな取組は、それを崩し、壊すために行うものであり、様々な価値観に触れることで、従来の自分の小さな価値観の枠組みを、気が付いたら気持ちよく出ていたという部分がすごく大事だと思う。

## II テーマ（ジャンル）に関する意見

- 彩の国さいたま芸術劇場を使って舞台芸術や音楽ができる。まず、さいたま芸術劇場で訴求力の強いものに豪華にお金をかけて行うことと、ジャンルはミックスのほうが良い。現代アートは風景を必要とするので、都市部では、現代アートだけでは少し厳しい。
- 市にゆかりがあるものを、文化的、先端的、領域横断的に、学術や産業なども含めて、希少価値のある内容として揃えることが大事。
- 順番に、今年は盆栽、次は漫画、その次は人形、鉄道というような形式で、毎回、4つの文化のいずれかに重点を置いたテーマを設定してはどうか。それも、博物館的に見せるのではなくて、今生きている部分と現代アートがどう関われるのかという視点で。例えば、人形がテーマの年には、さいたま芸術劇場でも人形をテーマにした作品をたくさん呼んでくる。毎回、全然違うことをしていた方が、「行かなきゃ」感が出る。
- 個人的には、盆栽が一番面白い。クオリティが高く、奥深い。人工的につくられた風景、植物と人間の関係などと幅広く捉えると、盆栽自体とも絡むし、盆栽と現代アーティストとのコラボレーションや、新しい先端的な植物学などの学術的な要素を取り入れるといった展開にもつながる。テーマは文化人が考えて、毎回きちんと設定する。人形は、そのまま掲げたほうが面白いが、それがどのくらい変容するかは、キュレーションの腕の見せどころ。
- いたずらに食文化やサブカルチャーなどにも手を出していくと、それぞれが中途半端になる。クオリティの高いものにしないと、今は人が集まらない。

## III 名称に関する意見

- 「さいたまトリエンナーレ」では分かりにくい。市が開催しているのに、県が主導していると勘違いされる可能性もあるので、何か独自の名称をつけたほうが良い。

#### IV 時期や会期に関する意見

##### [開催期間]

- 最近多いのは100日程度開催するもの。週末を3回入れて20日間程度だと楽だが、大きな予算をかけて20日間で終わってしまうのでは、通らないのではないか。
- 100日程度の会期があると、ロコミや取材の効果が現れるし、様々な相手とタイアップもしやすくなる。

##### [開催時期]

- 行政の予算執行や体制上、夏に開催されることが多い。また、ボランティアを確保するために、夏休みの時期に充てなければいけないということもある。他の芸術祭と重ならないように、春休みやゴールデンウィークなども検討してはどうか。

#### V 会場に関する意見

- 県立近代美術館全館と公園も活用して、少し思い切ったことをすれば、面白くて、求心力が出るだろう。
- 廃園になった保育園、廃校になった小学校を再利用して、小さなリノベーション系の拠点を増やしていくと、開催後の3年間の活動拠点になったりする。

#### VI 事業規模に関する意見

- 何らかの波及効果を期待するのであれば、開催年に10億円程度欲しい。

#### VII 開催体制に関する意見

- 独自性を持った注目度の高いイベントを行うためには、誰にお願いするかが大事。
- ディレクターを毎回変えるのは良くない。変えることでテーマ性が大きく変わる効果はあるが、その後何も残らない。
- さいたま市の場合、東京では見られないものを上演しなければならないというハンデがある。さいたま市で行う必然性、土地の文化や資源の再発見へとどうつながっていくかというストーリーを描ける文化的なプロデューサーが必要。アートや演劇、ダンスのプロデューサーではなくて、そういう文化観を持てるプロデューサーがいれば、必然的にほかへも波及していく部分が出てくる。
- ビジョンをつくるプロデューサーだけではなくて、そのプロデューサーのビジョンを根気強く伝え、最初は拒絶されたり、怒られたりすることを、笑って、しょうがないやと言える若いスタッフチームに、きちんとお金を払ってほしい。今は、できる人を日本中で奪い合っている状態だが、さいたま市は首都圏なので、きちんとした条件を出せば良いチームができる。

# 「(仮称)さいたまトリエンナーレ」に関する有識者インタビュー

(現代美術作家 白川昌生氏)

## I 開催意義や基本的な方向性などに関する意見

- ヴェネチアなどは、国際的に有名な観光地としてのベースがあって、その上に世界的に有名な展覧会を開催している。さいたま市の場合、4つの市が1つになってこれから特徴をつくっていくとなると、有名な作家を多く呼んで、お金をかけて開催するのも良いが、もう少し違うことも考えないといけない。
- 他の展覧会とは違う面白いことがなされているかどうか、まずは評価のポイント。普通の展覧会と変わらないのであれば、わざわざ誰も行かない。
- そのためには、それなりの覚悟や行政の許容度が必要。それができると、海外の作家や美術関係者の間では、「あそこだといろいろとやれるよ」と評判になる。

## II テーマ（ジャンル）に関する意見

- 現代美術の場合、美術的なものだけがアートとは思っていない。ポップミュージック、パフォーマンス、写真、映画、演劇など、いろいろなジャンルを超えたようなところでアートが動いている。具体的には、ジャンルを一つに特化させるかどうか。例えば映画や演劇など、何か軸を立てれば範囲が狭くなるが、ある種、特化することによりそれなりの強さになって、その周りに幅広いジャンルを付けていくことはできる。現代アートという形で進めると、いろいろな場所で似たようなものがたくさんあって差別化しにくい状況になっている。あえてジャンルを絞って実施すると、一般の人にもわかりやすい。
- 展覧会だけではなく、間を埋めるイベント、ダンス、パフォーマンス、演劇、映画、トークイベントやシンポジウムなどがあると良い。鉄道や漫画、盆栽などの関係者に来てもらって話をしてもらうようなシンポジウムもあると良い。
- アートだけではなく、演劇やダンス、映画、いろいろなジャンルで活動している地元の人たちにも参加してもらう方が良い。
- 国際展の前に市民のプロジェクトを立ち上げて、先に展開している方が活動しやすい。例えば、詩吟の会、盆踊りなど、地域で活動している人たちにきちんと声を掛けておけば、意識が変わってくる。そういうところに作家が来て、一緒に何かをする場合、すごく協力的な雰囲気になる。

## III 名称に関する意見

<発言なし>

## IV 時期や会期に関する意見

- 通常の展覧会だと長くて2か月程度で、作品を置いたら、その後作家は来ないという話になってしまうが、果たしてそれで良いか。会期の長さは、結局何を求めるかにもよると思う。
- 地域の人たちと一緒に共同制作するようなものだと、時間がかかるので、期間は少し長い方が良い。作家が長期に関わったところでは、市民グループの人たちの次へのやる気にもつながる。

## V 会場に関する意見

- 場所の問題は非常に大きい。歴史的な場所で、シンボルにもなり、かつ、自由に使えるような広さがあることが求められる。横浜トリエンナーレでは赤レンガ倉庫、越後妻有大地の芸術祭では山村、瀬戸内国際芸術祭は島といったように、他にはない、わりと特異なシチュエーションや場所が一つの魅力になっている。
- 美術館やホールを会場にすると、手を加えたり穴をあけたりはできないなど、ある程度の規制がある。また、展覧会形式だと、作家と地域の人が触れ合う機会はあまりない。それに対して、歴史的に特殊な場所や自由に使えるある程度の大きさがある場所だと、作家はそこに滞在して、場所にあった作品をつくるので、面白い作品ができるし、地域の人も関心を持つ。
- 個人的には、鉄道の車両センターなどで、使われていない、または会期中だけでも借りられる倉庫や空間があると良い。そこにある線路をそのまま作家が使えるようにすれば、ほかの展覧会場にはない、特異な空間になって面白いと思う。また、通勤・通学の電車から見えたりすると、面白いし、話題づくりにもなる。そういう場所が大きく使えると、インパクトは大きいだろう。
- ある程度の広さのあるメイン会場と、そこを中心に徒歩または自転車で回れるエリアで展開できると良い。
- 作家を呼んだときに具体的な場所を何カ所か提示する必要があるので、基本コンセプトを決めていく中で、ディレクターや美術関係者などが、市内を一緒に回って、候補地を幾つか選んでおく必要がある。

## VI 事業規模に関する意見

<発言なし>

## VII 開催体制に関する意見

- ディレクターは、2種類必要。国内外に発信するアートプロジェクトのディレクターのほかに、市民プロジェクトに関わって、文化団体などの話を聞いたり、まとめたりするディレクターも必要。
- 芸術家と会場管理者等との間をコーディネートするような人が必要。様々な場面で折衝が必要になるので、行政の人が上手く手続きを行う必要が出てくる。行政がさばけない場合は、ボランティアでもいいので、そういうことを専門に対応する人を配置しておいた方が良い。
- 作品を屋外に置くと、壊されることもあり得る。そういう場合の補償をどうするか考えなければいけない。管理体制については、地元の人々の協力が不可欠。特に、長期のイベントとなるとなかなか厳しい問題が出てくる。
- 会期後、出展作品をコレクションすると、市民にとっては面白いかもしれない。全部でなくても良いので、1点でも2点でもコレクションされると良い。作品を保存しておいて、次の展覧会が始まる前に再び設置すると、市民の記憶もよみがえるから、そういう活用も可能。

# 「(仮称)さいたまトリエンナーレ」に関する有識者インタビュー

(京都市立芸術大学学長・埼玉県立近代美術館館長 建島哲氏)

## I 開催意義や基本的な方向性などに関する意見

- トリエンナーレやビエンナーレの意義は、新しいアーティストを紹介することにある。定期的  
に開催するのは、その時々で最先端の動向を伝えるためである。
- 一級のアーティストが入っても良いが、そこで初めてデビューするアーティストがいることが  
トリエンナーレの価値となる。
- 国際芸術祭を通して、現代美術ファンが増える、ボランティアが活性化するなどの効果は部分  
的にあるかもしれないが、もっと大事なことは、異文化や他者との交流が楽しい思い出として  
残ること。他者との交流体験は、健康的な社会に不可欠な要素であり、それが市民社会の記憶  
の中に残ることで、戦争の抑止力となって、日本の安全保障にもつながる。
- さいたま市のブランドイメージが弱い中で、国際芸術祭をブロックバスター（圧倒的な印象や  
影響力を与えるもの）にして、ブランドイメージを確立することが必要。

## II テーマ（ジャンル）に関する意見

- 「ユニークさ」は落とし穴。ユニークで優れたものは、すでにほかでやっている。ほかでやっ  
ていないものは、「マイナー」なものに過ぎない。メジャーなものを外して、マイナーな分野に  
特化すると、話題にすらならないということになりがち。
- 「都市の魅力」と「ユニークさ」は重要なことだが、求心力のないユニークさをねつ造してし  
まうと危険。大規模なものをやるのであれば、正面突破で王道に行くことが絶対に必要。
- パフォーミングアートの場合、まずアーティストなどの関係者の日程を確保しなければなら  
ないことと、「世界初演」、「本邦初演」ということが非常に大きな意味を持つ。また、経費を分担  
するために、「フェスティバル／トーキョー」などと組む必要が出てくるので、美術の場合より  
も早い段階から動く必要がある。また、公演期間は、2週間程度が限界という難しさがある。
- パフォーミングアートのイベントだけで数か月を回すのは大変なので、常識的に考えると、ジ  
ャンルは美術がコアになると思う。

## III 名称に関する意見

<発言なし>

## IV 時期や会期に関する意見

- 競合イベントの時期を調査した上で、開催時期を検討した方が良い。できれば、競合しない方  
が良いが、不利な時期に行くくらいなら、良い季節に開催して、相乗効果を求める方が良い。  
常識的に考えれば、子どもたちが来やすい夏から秋にかけて行うのが自然ではないか。

## V 会場に関する意見

- メイン会場がないのが問題。全体で10,000㎡程度のスペースが必要。

- 彩の国さいたま芸術劇場はブランド力があって良いが、本格的な公演を行うとなると、スポット的に活用することになってしまうのではないかと。パフォーマンスアートを中心に3か月間も続けて開催するには、高額な予算と大変な覚悟で臨めばできるかもしれないが、前代未聞。どこもやっていないということは、実際にはできないということだと思ふ。アヴィニョン演劇祭は多額な予算をかけているが、それでも2～3週間程度。
- 美術を中心に考えると、最低でも県立近代美術館とうらわ美術館を確保する必要がある。さらに、まちなかの歩いて行ける範囲に2,000㎡程度の空きスペースを確保できると、コアゾーンができあがる。やはりコアゾーンは必要。その上で、少し離れて、彩の国さいたま芸術劇場なども活用できると良い。
- 全体として、面として、スケールとして、ある種の祝祭感を醸し出す必要がある。基本的には、徒歩、自転車、既存の交通機関でスムーズに回れるようなロケーションの設定が不可欠。

## VI 事業規模に関する意見

- トリエンナーレやビエンナーレを開催するには、スケールメリットが大事だと思う。美術館において1億円で開催しても、1万人程度しか来ない。
- 総事業費が10億円程度確保できると、バランスのとれた国際展ができると思う。ただし、メッセ会場などを使うと、会場費だけで数億円が必要ということもあるので、注意が必要。

## VII 開催体制に関する意見

- ディレクターの人選で99%が決まってしまうので、慎重に検討した方が良い。
- 特に初回の場合、リサーチの時間を十分に確保する必要があるので、平成28年度の開催に向け、平成26年の早い時期にディレクターを決定する必要がある。
- 海外の国際展の動向に詳しい人がディレクターにならないと、国際展として機能しない。また、実行委員会で制約をかけ過ぎてしまうことも避けるべき。
- 意思決定に関わる市幹部が早い段階で国際展を見ることと、情熱を持つことが大事。